

あの苦労は何だったのか

——戦後76年 語り続ける学童疎開の体験

戦時下という非常事態のなかで、強制された集団学童疎開。親元を離れ、慣れない集団生活のなか、子どもたちはどのように耐えて、生き延びたのか。学童疎開の語り部として活動する神崎房子さんに体験をお聞きました。

(前田真子)



学童疎開 語り部

かんざき ふさこ
神崎 房子さん

日本住宅会議関西会議、地域市民活動「結みのお」、みのおの交通を考える会メンバー、大阪府箕面市在住



兵士要員としての子ども

私は1934年生まれで、ちょうど小学校に入ったときに学校が国民学校になり、6年までいて国民学校を出たということになる。

戦争体験といえば学童疎開になるけど、最初、政府が勧めたのは縁故疎開だった。しかし利用する人は少なく、集団疎開となった。集団疎開は子どもの命を守るものではなく、戦死した兵士の次に戦地へ赴く人員確保のためにするもの。疎開先では子ども1人の生活費が10円かかる。昔は子どもが多く、3人いれば30円。サラリーマンの月平均所得が50円の時代やから、大金やね。

病気になっても医者がない、薬もない。働き手の男性は戦争に取られていない。いるのは女性とお年寄り。食料調達が一番の問題で、当時はさつま芋が主食で、そのつるの皮をむくとフキみたいになる。後で馬の餌と知って、そんなん食べさせられてたんかと。当時の子どもは栄養失調で成長が抑えられた。朝は玄米に“天井の棧が映る”と言われた具のない味噌汁、芋のつるを煮たものなんかのおかず一品だった。

通っていたのは十三の神津小学校で、家は鉄工所を営んでいた。父親は兵器の部品を作っていたから戦争には取られなかったけど、職人さんはいない。代わりに知らないおじさんがいるから聞くと、刑務所の人だという。その人の様子を

じっと見ている軍隊の監視員がいる、そんな生活だった。

寺への集団疎開

4年生の夏休みに集団疎開へ行った。リュックサックを背負って、最初は遠足かと思っていたら、親が集まってきて「何か違うな」と。疎開先は北摂地域7カ所で、年少者の面倒を見られるようにお姉ちゃんと弟とかの組み合わせになった。私は1年、3年、4年生の3人姉弟で30円もかかるけど、空襲の被害を受けるよりいい。でも1年は親がいないと精神的に不安定になることもあって、親元残留組として帰された。3年の妹も引きとられた。

当時の北摂エリアは果物の産地で、今の住宅地がミカン林だった。田舎の農家へお風呂に入れさせてもらいに行くんですけど、そのときに「親と離れて可哀そうやな」とミカンを1個ずつくれる家があった。よその家ではもらえない子もいるから、そこで食べて帰ったりしたね。もう一つの楽しみは、ミカンの木につく大きな半透明のカタツムリ。それを当時のカンテキ（コンロ）で焼いて醤油をつけると、貝の味がする。唯一の動物性タンパク質だったから、やみつきになった。

先生も24時間子どもの面倒を見ていたけど、いろんなことが起こった。就寝後に数名の男の子が抜け出して寺から石橋まで歩き、そこから電車に乗せてもらって十三の家まで帰った。いわゆる“脱走組”。親も驚いた。次の日には疎開先へ戻され、先生に怒られていたけど、私ら女の子は「家へ帰れていいなあ」と思うてたよ。寺への集団疎開は1日くらいなら楽しいけど、3、4日たっても帰れず、次第に「思っていたことと違う」と分かってくる。陽が落ちるころには寺の回り廊下に並び、毎晩泣いていた。先生はどうにもできず、子ども心にも「もう帰れない」と分かり泣き止んだ。

戦後、お寺をたずねたら、疎開児のいた部屋は畳を全部燃やしたと言っていた。ノミ、シラミ駆除のため、頭髮からはボロボロ落ちてくるし、下着の縫い目にシラミの行列ができ

る。当時の衣服は木綿で、沸騰したお湯に入れて煮沸したけど、発生は止められない。指の間にできる疥癬（皮膚の病気）も流行って、ただれて痒かった。

お礼に伺った炊事の賄い婦の方も、夫は戦地へ取られ、子ども2人をかかえ、「毎日、芋のつるを煮炊きするのが辛かった」と言っていた。戦争では女性、子ども、お年寄りが大きな悲劇に合う^{*1}。

戦後は自給自足

その後、疎開先は池田、能勢と寮変えをし、1945年3月に空襲があって大阪がやられた。8月に地域の小学校に集められ、ラジオから天皇陛下の玉音放送を聞いた。雑音が多くて何を言っているかわからなかったけど、親や先生が泣き出して、「戦争に負けた」と言われた。子どもたちは心のなかで、「バンザイ！家に帰れる」と思っていた。2カ月後の10月、ようやく先生が疎開先から子どもを家へ連れて行ってくれた。途中、南のほうを向くと、何も無い。十三のプラットホームから淀川、阪急百貨店だけが見えただけだった。

食べ物は、兵隊の食料が回ってきたと思うけど、鮭の缶詰があった。それを芋のつるとすき焼きにしたり、田んぼでイナゴを取ってカンテキで焼いて醤油で食べたり。歯磨き粉も今と違い粉だったけれど、食べた。口に入る物は何でも食べていた気がする。兵隊さんも戦死だけでなく、餓死が多かった。戦後は自給自足の生活。母が着物と食べ物を交換しに農家へ行くのについていった。母の着物の帯をほどいて中の芯地で作ったリュックサックを担ぎ、そこに米を入れ、いわゆるヤミ米を買いに行った。見つかると没収されるから、取り調べの警官の足の間をすり抜けて十三の駅のホームから飛び下り、神戸線のほうへ移って家へ逃げ帰ったこともある。

心から抜けない体験

住宅疎開で空き地になった畑で野菜も作った。肥料は人糞、それを桶で担いで運ぶのは子どもの仕事だった。ニワトリは卵を取るためなんだけど、イタチに取られたりした。そ

の後、配給が始まった。アメリカからの物資でなんば粉（南蛮黍、トウモロコシの粉）があり、溶いたものを20cm×10cmほどの箱へ入れて、電気を通してパンにするんだけど、これはまずい。その後メリケン粉が入り、いくつかパン屋さんが出て、そこへ粉を持って行ってパンにしてもらおう。それは食べられた。1950年朝鮮動乱が起こって、日本は盛り返した。隣の悲劇に日本は復活した。動乱の特需がなかったら、復活に10年はかかっている。

疎開中、勉強はあまりしてないね。体操と音楽がゼロ。片っ端から横文字が禁止になって^{*2}、「ドレミファソラシド」が「いろはにほへとち（高音）」。「今さら言われへん」となったけど、そんな授業もなくなった。この横文字禁止のせいで、父の工場では刑務所出の素人相手に、扱う道具は横文字が多いから、説明するのに困っていた。

戦時中は、電球にカバーをして光が漏れないようにしていたのを、戦後はしなくもよくなった。「明るくなった！」と嬉しかった。やっぱり、忘れないね。こういう体験は、心から抜けない。「話を聞きたい」と言われれば、話しておこうと思う。今でも“何でこんな思いをしなあかんかったん”という思いがある。

【インタビューを終えて】「当時はよく分からなかったけど、あとで知ったら……」との言葉から、神崎さんが絶えず自分が体験した戦争について学び、考えてきたかが分かる。参考にどうぞと、資料のコピーも下さった。「戦争は被害ばかりではなく、加害の歴史もしっかり伝えないとだめだと思う」と締めくくった。経験者の「語り継ぐ戦争」は、未経験者から子どもたちへ「資料や言葉で伝え継ぐ戦争」となっていくが、風化させない。絶対、しない。

〔註〕

- ※1 1945年1月、徳島県美馬郡貞光町の真光寺で、本堂付近から出火した火事により大阪の南恩加島国民学校の児童16名が焼け死んだ事故。後に一人ひとりの名前を刻み込んだ16地蔵が建立された。
- ※2 横文字の禁止による言い換えの例として、カレー⇒「辛味入汁掛飯」、サイダー⇒「噴出水」、バイオリン⇒「提琴」、コントラバス⇒「妖怪的四弦」など。



学童疎開の様子。野菜洗いの手伝い（南百済国民学校 疎開先は大阪府古市村）写真提供：ピースおおさか